

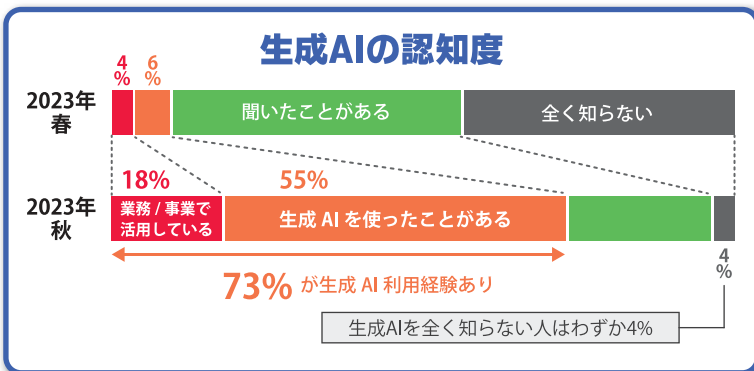
通信・IT ネットワークの分野では、日々新しい技術が開発され、より効率的で、より安価なサービスが次々と生み出されています。知らないことは、イコール企業利益の損失です。そこで私たち大和電設工業は、情報通信やITソリューションの『知って得する最新情報』を、お世話になっている皆様に定期的にお伝えしていきます。隔月発刊のDDK通信、ぜひお楽しみください。

生成AIにさらに注目

OpenAIが2022年にChatGPTを公開してから「生成AI」が大きな注目を集めるようになってきました。生成AIは、テキスト・画像・動画・音声のそれぞれの機能に分類され記録した大量の情報を活用して創成する能力に長けています。このことより、創設的な業務や比較などの業務で活用することを期待され、また、利用方法もクラウド経由で安価(機能面から考えると安価に思える)で利用し易い環境となっています。

現在では、インターネット検索ソフトのブラウザやマイクロソフトのOFFICEなどにも生成AIが組み込まれ、私たちの利用をサポートしてくれています。当社では業務ソフトの内製化で生成AIによるプログラミングのサポートでも活用しています。今回は、生成AIの浸透について検証してみたいと思います。

生成 AI に関する調査

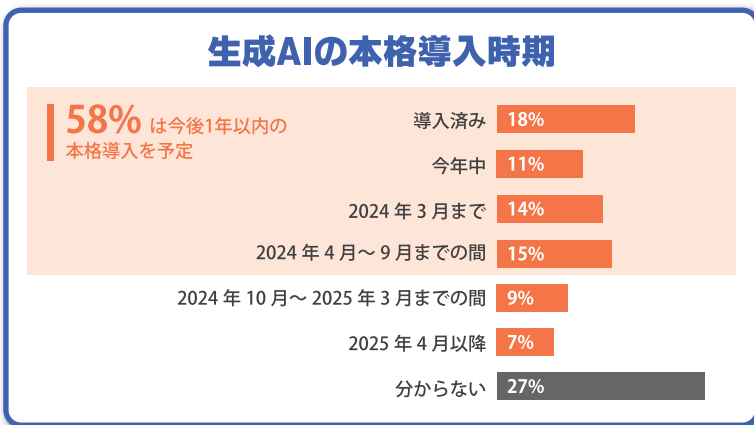


左記のように僅か半年間で生成AIを「知ってる」から「使った」に大きくシフトし、さらには企業が何かしら「生成AI」を導入しようという傾向があらわれてきています。「生成AI」の利用が仕事をサポートするツールとして大きなウェイトを占めるようになってきています。

「生成AI」活用の流れは、自社専用の個別システムとしての利用に向かっています。そのためにはナレッジ(社内の経験やノウハウ)の整備をすることが必要となりますが、さらに生成内容の正確性を向上させるために「RAG (Retrieval-Augmented Generation: 検索拡張生成)」が求められます。RAGがあると、「生成AIは適切な文章で質問をしないと似たような回答が得られない」、又は「事実とは異なる内容や、文脈と無関係な内容の出力がもっともらしく生成される」といった問題を回避することができるようになります。

先般、発表された「Microsoft 365 Copilot」では生成AIで過去の資料を参照したり、指示した内容から必要なWordやExcelの資料を自動的に作成してくれます。

業務効率や生産性向上の必須アイテムとして、今後も色々なアプリやクラウドサービスで活用されていくことになると考えられます。



PwC コンサルティング「生成 AI に関する実態調査 2023 秋」より

まとめ

生成AIは、学習し新たな創造物を生み出す能力に長けています。報告書の文面を考えたり、大量に流れる生産ラインから不良品を見つけ出したり、コールセンターではお客様の相談の一次対応をしてくれたりと、様々な場面で私たちの仕事を助けてくれることが期待できます。反面、嘘の情報を本当のことのように生成することも可能で、私たちが気がつかないうちに様々な悪影響を及ぼしてしまっている危険性もあ

ります。しかし、人手不足の解消や商品開発のスピード化などで期待され、今後もますます活用が伸びると考えられます。

生成AI開発競争は激しく、生成AIを使ったサービスの提供や導入を支援する会社も増えており、生成AIの活用はしやすくなっていますが、どのように活用するのかといった発想力が我々利用する側に求められています。